［概要］

高度経済成長期以降，混住化や都市拡散問題が深刻化し，市街地から離れた農村地帯において無秩序な土地開発が行われている．本研究では，富山県砺波市東野尻地区を事例に，農村部の住宅開発の変遷を把握し，さらに東野尻地区にある小規模開発住宅団地に移ってきた居住者に焦点を当て，居住者の特性を捉え，どのような集団であるかを明らかにした．聞取り調査を通して，当該地域には潜在的他出者が多く存在しており，実家を出た後の新家としての居住地に現在の居住地が選択されていることが明らかとなった．彼らは結婚を機に新たな居住地を取得する必要があるため，潜在的他出者が存在する限り新たな住宅を取得する世帯は一定数発生し続けると考えられる．さらに，富山県では近隣市町村間での人口移動が盛んであり，新たな居住地を取得する際は前住居から近い場所を選択する場合が多い．砺波市は交通面や商業施設が充実しているという地域イメージがあるため，特に隣接する南砺市や小矢部市の流出者の多くは砺波市へ流入していることもわかった．砺波市の住宅は増え続けると予想されているが，今後の住宅団地の住まい方に注目し，計画的に住宅を供給することが求められる．人口減少社会において，砺波市の人口流入が増加する理由は，潜在的他出者や立退きなどによって転居を余儀なくされた砺波地区の住民が，前住居の近隣であり，生活利便性の高い当該地域を新しい居住地として選択しているからであると考えられる．

キーワード：農村，住宅団地，人口移動，潜在的他出者，新家